

戦後初期沖縄解放運動資料集 全3巻

表示価格は、全て税別

◎編集——加藤哲郎・森宣雄・鳥山淳・国場幸太郎

◎概要——A4判・上製・各巻平均450頁

◎構成及び配本（◎配本は第2巻→第3巻→第1巻の順です）

第1巻 米軍政下沖縄の人民党と社会運動（一九四七～五七年）

【編／解説】 鳥山淳・国場幸太郎

- 第1部 解説（鳥山淳）
- 第2部 沖縄人民党ほか戦後初期沖縄政治史資料
- 第3部 「人民文化」『世論週報』
- 第4部 米軍による沖縄社会運動監視資料（英文）
- 第5部 沖縄人民党・非合法共産党弾圧関連記事

第3回配本 2005年10月
 本体価格28,000円＋税
 ISBN4-8350-3316-7

第2巻 沖縄の非合法共産党資料（一九五三～五七年）

【編／解説】 加藤哲郎・国場幸太郎

- 第1部 解説1 新たに発見された沖縄非合法共産党資料（加藤哲郎）
- 解説2 沖縄の非合法共産党 資料研究案内（国場幸太郎）
- 第2部 沖縄非合法共産党関係資料（金澤幸雄氏所蔵）
- 第3部 非合法共産党機関紙「民族の自由と独立のために」（渡慶次正一氏所蔵）

第1回配本 2004年11月
 本体価格28,000円＋税
 ISBN4-8350-3317-5

第3巻 沖縄非合法共産党と奄美・日本（一九四四～六三年）

【編／解説】 森宣雄・国場幸太郎

- 第1部 解説（森宣雄）
- 第2部 沖縄・奄美統一戦線
- 第3部 沖縄非合法共産党と日本共産党
- 第4部 日本共産党の沖縄対策

第2回配本 2005年5月
 本体価格28,000円＋税
 ISBN4-8350-3318-3

◎定価——各巻 本体価格28,000円＋税（全3巻揃価格84,000円＋税）

●関連図書のご案内

琉球新報【縮刷版】解説 新崎盛暉 第1期全9巻 本体揃価格252,000円＋税

うるま新報【縮刷版】解説 新崎盛暉・丹野喜久子 全6巻 本体揃価格168,000円＋税

沖縄新民報・自由沖縄【縮刷版】解説 新崎盛暉 全2巻 本体揃価格48,000円＋税

不二出版

〒113-0023 東京都文京区向丘1-11-11
 TEL 03-3811-4433
 FAX 03-3811-4464
 振替 001601194084

戦後初期 沖縄解放運動資料集 全3巻

編集Ⅱ 加藤哲郎・森宣雄・鳥山淳・国場幸太郎

◎各巻構成

第1巻 米軍政下沖縄の人民党と社会運動（一九四七～五七年）
 【編／解説】 鳥山淳・国場幸太郎

第2巻 沖縄の非合法共産党資料（一九五三～五七年）
 【編／解説】 加藤哲郎・国場幸太郎

第3巻 沖縄非合法共産党と奄美・日本（一九四四～六三年）
 【編／解説】 森宣雄・国場幸太郎

(3) 沖縄人民党役員名簿
 一九四七年十月末現在

中央委員長 前管理区豊後村高江洲四 （久良見）	浦崎康華
書記長	屋部 忠
常任中央委員	石川幸一五郎
	玉城村親孝
	本郷町渡文地
	那覇市豊後町三三三組
	糸満町三三九
	糸満町三三五
	糸満町三三五班天
	三三九
	三和村名城邑
	糸満町三三二
	那覇市豊後町三三三組
	豊後町
	首里市山川町三三
	玉城村親孝
中央委員	新垣幸吉
	伊敷善藏
	上里良徳
	東恩納寛教
	新垣松助
	菅国策宣
	徳元八一
	瀬長亀太郎

◎概要——A4判・上製・各巻平均450頁

◎推薦——新崎盛暉（沖縄大学前学長）・富山一郎（大阪大学助教授）

◎定価——各巻 本体価格28,000円＋税（04年11月より配本開始）

★新たに発見された沖縄・奄美非合法共産党関係資料の全貌！ 不二出版

「島ぐるみ闘争」へつらなる

戦後初期沖縄解放運動の実像に迫る

新崎盛暉 (沖縄大学前学長)

一九五二年四月、日本は対日平和条約発効によって独立し、沖縄はその条約三条によって米軍政下に置かれ続けることが決まった。米軍が支配権の合法化を背景として、強引な軍事基地建設を進めた五〇年代前半は、沖縄民衆にとつてのいわば「暗黒時代」といえた。この時代の民衆の抵抗闘争を理論的に、そして組織的に支えたのが、一九四七年に結成された沖縄(琉球)人民党である。米軍は、五二年夏ごろから、反米抵抗政党としての色彩を強めた人民党を共産主義政党とみなして、露骨な弾圧の対象にしていく。人民党もまた、米軍の人民党弾圧・非合法化に対処する必要もあって、五三年夏、党の中に非合法政党(日本共産党琉球地方委員会)を組織する。人民党より半年ほど早く奄美で結成されていた非公然政党奄美共産党もここに加わるが、五三年一月の奄美返還によって、琉球地方委員会は沖縄県委員会となる。

人民党、非合法共産党、奄美共産党、日本共産党の関係、それぞれの方針や活動の実態などは、これまで、厳しい政治状況下での資料の散逸や関係者の現実政治への配慮もあって、必ずしも明らかではなかった。

この資料集は、五〇年代の沖縄人民党の理論的組織的活動を支えた中心人物の一人である国場幸太郎さんと、戦後初期沖縄の政治運動に強い関心を持つ三人の研究者たちの共同作業として資料収集がなされ、解説・編集・刊行されるという。わたしたちが、状況証拠から類推せざるを得なかった戦後初期沖縄の実像が、よりリアルに浮かび上がってくるものと思う。

五〇年代前半期の闘いの積み重ねを経て、沖縄民衆は、五六年六月の「島ぐるみ闘争」を実現し、沖縄は新しい時代を迎えることになった。しかし沖縄は、なお米軍事戦略のくびきから解放されているわけではない。いまこそ戦後沖縄民衆闘争の原点に立ち返ってみる必要があるかもしれない。

……あらさき・もりてる

連帯の問題

富山一郎 (大阪大学助教授)

複数の立場や世代が交差する中で生まれた、画期的な資料集である。文字通り運動の当事者である国場幸太郎氏、当事者の言葉に真摯に向き合った今最も期待される若き歴史研究者、運動関係文書を自らの蔵に蓄積し続けた金子幸雄氏、信頼関係のなかで資料探索を続けた加藤哲郎氏らのさまざまな共同作業が、ここに結実した。またこの共同作業自身が、現代史において資料とは何かという問いを、問いかけていく。

この資料集には、基地建設にかかわる資本が労働力として巻き込んでいった人々を、沖縄・奄美統一戦線として組織し、沖縄の非合法共産党を作り上げ、奄美復帰と同時に「外国人」とされ、米軍政府からの徹底した弾圧をうける中、潜伏し、同志である国場幸太郎氏に見送られながら小船で沖縄を後にした奄美出身の林義巳氏の言葉も、ある。今年亡くなった林氏は、所蔵していた文書と共に自らの運動経験を若き研究者に遺したのだ。また林氏と非合法共産党を作り上げた国場幸太郎氏は、自らの運動にかかわる文書を、それを発見した研究者と共に再読した。遺された言葉が現代史の資料になっていく工程が、新たな人の繋がりを生み出している。かかる意味においてこの資料集は、過去の事件に所属するのではなく、未来に続く議論の中にある。

所収されている人民党あるいは非合法共産党にかかわる資料群が読むものに突きつけるのは、中央の方針の周辺における展開ではなく、場に密着した闘いを展開しながら場を超えた関係性を希求し続けた人々が遺した痕跡であり、いいかえれば、正しい意味での連帯の問題に他ならない。それはまた、奄美や沖縄において共産主義者であるということとは何かということでもある。

一九五〇年代の島ぐるみ闘争が、決して復帰運動に向けた黎明期の萌芽的で自然発生的な運動ではなく、いかに組織された悟的な力であったのか。あるいは、現在の沖縄における革新共闘あるいは保守なる勢力が、どのような固有の歴史の中で形成されていったのか。また、「本土」の沖縄出身者の活動と沖縄の闘いが、お互いにどのような繋がりを模索していたのか。そして、なぜ奄美における運動が「沖縄問題」から消えていったのか。資料集から浮かび上がる個々の具体的論点は、奄美や沖縄の現代史が内蔵し、かつ未完のまま放置されている可能性に、直結している。今奄美や沖縄に言及する人々は、この資料集からも一度自らの考えを再検討し、編者たちと同様、未来に続く議論に参加していく必要があるだろう。この資料集は、従来の日本共産党史や人民党史、あるいは復帰運動史の空白を埋めるのではなく、問われているのは、連帯の可能性を空白として放置し続けた今に至る歴史である。

……とみやま・いちろう

万国の労働者団結せよ!

平和と民主主義と生活を守り 反米・祖国復帰・土地防衛の 統一戦線の勝利をめざして

民族の自由と 独立のために

第2号 1954年12月15日 週刊 1部3月10日

つよくなった国民の力

吉田内閣遂に総辞取 鳩山は保守合同への時かせぎ

十二月七日ついに吉田内閣は、対して、平和と民族の独立のための総辞取した。これはアメリカに反して、たまたまたってきた日本国民の力が、対し再軍備と重臣主義の復活に反して、強まった結果である。

一九四八年(昭和二十三年)に第二次吉田内閣が成立して以来、吉田政府はアメリカ帝国主義者のいこうとおもつて、日本国民を苦しめてきた。吉田政府は日本国民をアメリカ帝国主義者の弾丸よけにするために、再軍備と重臣主義の復活をはかってきた。一九五一年にはサンフランシスコで「対日講和条約」と「米日安全保障条約」にこれにひきつづき「日本行政協定」をむすんでアメリカが永久に日本を占領してアジア侵略の基地にするのをたすけた。沖縄をアメリカに売りわたしたのもこれらの条約を結んだ吉田政府である。吉田政府はまた再軍備と重臣主義の復活を強行するために「破壊活動防止法(破壊法)」をはじめいろいろの反動法律をつく

吉田とかわらぬ鳩山内閣

十二月九日、吉田のあとをついで鳩山が首相になり、十日には鳩山内閣が成立した。鳩山内閣の記者会見で、アメリカに緊密に協力して防衛力を強化する」と声明した。鳩山内閣が吉田と全くかわらないことをバクバクとした。またワシントンも「鳩山内閣ができてから、日本の反動勢力は保守合同によって再軍備をおし進める政府をつくらうとしたが、平和と独立をめざす国民の力はこれをおさげなかつた。保守合同の意図とは反対に、自由党は分裂をくりかえし、民主党が代表者向が衆参両院でおこなわれた。参議院本会議員五郎は、小笠原五郎議員は中野、小笠原の主張を回復しようとして、先にとりあげ、琉球の同胞を見殺しにするつもりかと、あらまし次のように述べた。

沖繩を見殺しにするのか 共産党須藤議員が追求

臨時国会が二日目の十二月一日、前日付の新聞で、田首相、小笠原議員の演説にたいする野党各派の代表者向が衆参両院でおこなわれた。参議院本会議員五郎は、小笠原五郎議員は中野、小笠原の主張を回復しようとして、先にとりあげ、琉球の同胞を見殺しにするつもりかと、あらまし次のように述べた。

鳩山内閣は、保守合同によって再軍備をおし進める政府をつくらうとしたが、平和と独立をめざす国民の力はこれをおさげなかつた。保守合同の意図とは反対に、自由党は分裂をくりかえし、民主党が代表者向が衆参両院でおこなわれた。参議院本会議員五郎は、小笠原五郎議員は中野、小笠原の主張を回復しようとして、先にとりあげ、琉球の同胞を見殺しにするつもりかと、あらまし次のように述べた。

……とみやま・いちろう

に再軍備をすすめる。アメリカ帝国主義者のいこうとおもつて、日本国民を苦しめてきた。吉田政府は日本国民をアメリカ帝国主義者の弾丸よけにするために、再軍備と重臣主義の復活をはかってきた。一九五一年にはサンフランシスコで「対日講和条約」と「米日安全保障条約」にこれにひきつづき「日本行政協定」をむすんでアメリカが永久に日本を占領してアジア侵略の基地にするのをたすけた。沖縄をアメリカに売りわたしたのもこれらの条約を結んだ吉田政府である。吉田政府はまた再軍備と重臣主義の復活を強行するために「破壊活動防止法(破壊法)」をはじめいろいろの反動法律をつく

《収録資料一覧》

第1巻 米軍政下沖繩の人民党と社会運動(一九四七〜五七年)

- 編集解説 烏山淳・国場幸太郎
第1部 解説
第2部 沖繩人民党は戦後初期沖繩政治史資料
① 陳情書 一九四七年九月三日 沖繩人民党「陳情書1」(琉球政府文書) および「門奈直樹コレクション」
② 沖繩人民党役員名簿 一九四七年十月末日現在(琉球政府文書「沖繩人民党に関する綴」)
③ (沖繩人民党綱領・政策・規約)(琉球政府文書「沖繩人民党に関する綴」)
④ 沖繩人民党役員辞任に伴う名簿改定の件 一九四八年三月十五日(琉球政府文書「沖繩人民党に関する綴」)
⑤ 沖繩人民党役員名簿(琉球政府文書「沖繩人民党に関する綴」)
⑥ 政策・規約・スローガン(琉球政府文書「沖繩人民党に関する綴」)
⑦ 沖繩人民党役員名簿 一九四八年八月二日選任(琉球政府文書「沖繩人民党に関する綴」)
⑧ 陳情書 一九四九年二月二日 沖繩人民党中央常任委員会「沖繩人民党当時の軍指令及一般文書5-15」(琉球政府文書)
⑨ 沖繩人民党役員名簿 一九四八年九月一日承認(琉球政府文書「沖繩人民党に関する綴」)
⑩ 綱領・政策(琉球政府文書「沖繩人民党に関する綴」)
⑪ 沖繩人民党役員名簿 一九四九年五月一日現在(琉球政府文書「沖繩人民党に関する綴」)
⑫ 沖繩人民党 宣言・綱領・規約(草案)(琉球政府文書「沖繩人民党に関する綴」)
⑬ 沖繩人民党の報告 一九四九年二月二日(琉球政府文書「沖繩人民党に関する綴」)
⑭ 人民党の役員調の報告 一九五〇年一月六日(琉球政府文書「沖繩人民党に関する綴」)
⑮ 人民党変遷略史 沖繩人民党(琉球政府文書「沖繩人民党に関する綴」)
⑯ 人民党の報告 宣言・綱領・規約 第四回大会 一九五〇年八月三日(琉球政府文書「沖繩人民党に関する綴」)
⑰ 役員名簿
⑱ 一九五一年二月 一般報告(組織並農民問題報告) 沖繩人民党第五回大会 沖繩人民党「比嘉春潮文庫」
⑳ 役員名簿に関する件 一九五二年二月二日(琉球政府文書「沖繩人民党に関する綴」)
党役員及行動綱領一部改定に関する報告 一九五四年一月十五日 琉球人民党 「琉球人民党に関する綴」(琉球政府文書)
沖繩第四回統一メーデー大会宣言ならびに決議集 一九五五年

- 《第七回大会での綱領・規約の改正と役員決定》一九五六年二月一日 沖繩人民党中央委員会「一九五六年政党に関する書類」(琉球政府文書)
ブライス勧告についてアゼンハワー米大統領への公開状 一九五六年七月一日 沖繩人民党拡大中央委員
《沖繩における労働事情 1956・7・26》一九五六年七月二六日
《人民党労働対策部方針案 一九五六年》一九五六年
沖繩人民党 第八回大会決定報告集 一九五六年十一月四日 沖繩人民党 林義巳資料
第3部 「人民文化」・「世論週報」(人民党の実質的な機関誌)
「人民文化」創刊号(一九四九年六月)、第二号(一九五〇年二月)、第五号(一九五〇年四月)、第六号(一九五〇年五月)、第八号(一九五〇年八月)
「世論週報」特集号(一九五一年七月及び一九五二年一月)、再刊第一号(一九五三年六月)、第四号(一九五三年八月)
第4部 米軍による沖繩社会運動監視資料(英文)
第5部 沖繩人民党・非合法共産党弾圧関連記事
「沖繩タイムス」一九五四年八月三日〜一九五五年八月二六日 掲載記事一〇点
「琉球新報」一九五五年八月七日〜同年八月二五日 掲載記事四点

- 11 党報告書「報告 四月二日 田村」
12 党報告書 奄美地区委員会アカハタ分局長宛 アカハタ京都支局長 峠田重次
13 党報告書「派遣隊の各個人別収支明細書」
14 党報告書「報告書」喜界班 報告者 鹿兒島川島逸郎 工作期間四月二日〜四月二十九日
15 党文書「今後地区党の進む道」
16 党文書「出張報告」堀
17 党文書「報告 レンケツキ」堀
18 党文書「徳之島伊村阿権の古岡武二氏の土地闘争について」
19 党文書「現地党Vの方針 全人民大衆の力を結集して敵の狂暴な弾圧に総反撃せよ」
20 党文書「全国会議討論資料」
21 党文書「当面する闘いの方向」
22 党報告書「月刊報告その一 沖繩問題の発展」宮島 一月二六日
23 党報告書「月刊報告その二」宮島 一月二五日
24 党文書「工作を結ぶにあたって」
25 党報告書「関西琉球G総会報告書」茂岡 一九五五年三月三日
26 党書簡 山元名
27 党報告書「現地の状況」一九五五年五月三〇日
28 党報告書「宮島様 報告 六月十七日 G」
29 党文書「新しい体制についての意見」琉球G指導部
30 党文書「昭和製作所 月本次郎殿 南陽貿易 平良鉄男 七月三日」
31 党文書 国場幸太郎報告書
32 党文書「沖繩に於ける党建設上の誤りと欠陥について」資料「お願い」留学生神谷尚、国吉真栄、福地曠昭 再渡航申請拒否事件手記 一九五五年一月三日
33 党文書「党活動の総括」琉球中央G 白畑光敏 一九五五年一月一日
34 党文書「質問と御願い」琉球中央G 白畑三蔵 中央常任幹部会御中 一九五五年一月一日
35 党文書「討論のまとめ」琉球G指導部 一月十七日
36 党書簡「琉球対策 高安様 二月一日 白畑三蔵」
37 党文書「沖繩返還国民運動の総括」一九五六年三月二五日
38 党文書「日本共産党奄美地区委員会 第一回地区党協議会一般報告」一九五六年四月
39 党文書「資料 戦後十年間における奄美の党の歩いた道」日本共産党奄美地区委員会

《収録資料一覧》

- 41 党文書「沖繩県人の組織について」一九五六年七月一日 本津川地区市岡S 平良助次郎 中央委員会幹部会殿
42 党文書「三光社 川田信夫殿 うるま商會 宮城幸雄」
43 党書簡「高安兄宛」九月二八日
44 党文書「各党の沖繩対策、アメリカの世界戦略と沖繩基地、沖繩解放の基本的課題」
45 活版新聞「基地沖繩」第一六号(昭和三年三月二日)
46 党文書「沖繩返還運動の政治宣伝と組織化について(案)」一九五七年一月〇日
47 活版書籍広告 那覇市長瀬長亀次郎序・沖繩問題調査会著「水攻めの沖繩」青木書店
第3部 非合法共産党機関誌「民族の自由と独立のために」
第2号 「つよくなった国民の力、吉田内閣遂に総辞職、鳩山は保守合同への時かせき」
第3号 「モロトフ外相声明、日ソ関係正常化は両国の利益に一致」
第4号 「沖繩問題を一九五五年の平和運動のかなめに、沖繩八十万同胞へ送る挨拶、平和ヨロゴ日本委員会から」
第5号 「バクロされた暴政沖繩の実態、沖繩を返せ、立ち上る八十万同胞」
第6号 「日ソ国交回復、ソ同盟政府正式に申入れ」
第7号 「総選挙終わる、民主勢力議席の三分の一をかくとく」
第8号 「鳩山内閣原子戦争に協力、国会質問にこたえ再び基地提供を言明」
第9号 「日ソ交渉、鳩山内閣ひきのはず、選挙すんで態度急変」
第10号 「アジアはかわった、アジア・アフリカ会議成功裡に終る、国際緊張緩和と世界平和に貢献」

- 日本共産党九州地方委員会第三回地方委員会報告「オキナワ取り戻し運動について」(加藤・水野資料) 一九五六年一月二五日
霜多正次「沖繩」『新日本文学』一九五二年五月
霜多正次「基地沖繩の労働者」『新日本文学』一九五三年八月
霜多正次「孤島の人々」『新日本文学』一九五四年一月
那覇市政再建同盟「島と人民裁判 真相はこうだ」一九五七年二月五日
島義基「真相」自由と建設編集部 一九五八年二月一日
第3部 沖繩非合法共産党と日本共産党
一 国場幸太郎関係資料
・国場幸太郎インタビュー記録
・国場幸太郎「沖繩出身学徒の現況」『おきなわ』一卷二号、昭和二五(一九五〇)年五月
・国場幸太郎「沖繩の叫び」『新日本文学』一九五二年八月
・国場幸太郎「沖繩の叫び(続)」『新日本文学』一九五二年九月
二 「琉球学生新聞号外」一九五二年九月三日
・沖繩諸島祖国復帰国民大会「日本復帰国民大会ニュース」一九五三年三月一日
三 沖繩解放論争資料
雑誌論文 牧瀬・国場論争
1 牧瀬恒二「沖繩における民族意識の形成と発展 戦後の沖繩史にそって」『思想』一九六一年一月号
2 国場幸太郎「沖繩とアメリカ帝国主義 経済政策を中心に」『経済論評』一九六二年一月号
3 国場幸太郎「沖繩の日本復帰運動と革新政党 民族意識形成の問題に寄せて」『思想』一九六二年八月号
4 牧瀬恒二「沖繩政論」『思想』一九六二年八月号
5 森秀人「ひき裂かれた歴史 はげしく傾向的な史観 比嘉春潮・霜多正次・新里恵二著『沖繩』書評」一九六三年二月一日(以降、資料18まで「日本読売新聞」より)
6 新里恵二「沖繩をどう考えるか 新沖繩論を樹立せよ 差別と偏見は日本社会の構造と不可分」二月二五日
7 森秀人「沖繩解放戦線の国籍 祖国復帰論者たちの批判に答える」四月一日
8 新里恵二「無責任きわまる言いがかり 森秀人氏は琉球独立論者か」五月六日
9 森秀人「祖国復帰論と日本独占資本 祖国復帰論者 新里恵二への再反論」六月一日
10 新里恵二「琉球独立論者の『迷論』 鞭と大言壮語の挑戦者・森秀人への批判」六月二四日

- 11 国場幸太郎「民族主義をどう評価するか 森・新里の沖繩解放論争を読んで」七月八日
12 新里恵二「米帝国主義の『免罪論』 沖繩解放闘争の方式をめぐる森・国張りの関連を論ず」七月二九日
13 国場幸太郎「沖繩解放論 新里氏の批判に答える 古典的植民地政策観の誤りについて」八月一日
14 国場幸太郎「沖繩解放論 新里氏の批判に答える 2 アメリカの対沖繩政策の変遷 資本主義の全般的危機の深化と沖繩軍事基地」八月二六日
15 国場幸太郎「沖繩解放論 新里氏の批判に答える 3 アメリカ占領支配の矛盾の展開 民族分断の政策は振興ブルジョアジーを日本資本主義との結合を強めた」九月二日
16 国場幸太郎「沖繩解放論 新里氏の批判に答える 完 日本独占資本の協力の根拠 アメリカ帝国主義の軍事政策そのものを打ち破る」九月一六日
17 新里恵二「なりそこないの構造改革論 国場幸太郎「沖繩解放論」への批判」一〇月七日
18 国場幸太郎「差別・偏見の再生産理論」の破産 新里沖繩解放論への最終的反論 一〇月四日
第4部 日本共産党の沖繩対策
一 基本方針文書
・一九四六年二月二四日 日本共産党第五回大会より沖繩人連盟全国大会へ「沖繩民族の独立を祝うメッセージ」(「アカハタ」一九四六年三月六日)
・「青年沖繩」第三号、一九四七年七月発行「沖繩問題座談会」一九四七年二月 日本共産党第六回大会綱領
・一九四八年八月二六日 日本共産党中央委員会「講和に対する基本方針」
・「平和と独立」一九五一年一〇月二七日 「沖繩、奄美大島、小笠原諸島の同胞に訴える」
・「アカハタ」一九五三年八月二七年「奄美大島の完全解放のために」
・「平和と独立」一九五四年四月一日「琉球対策を強化せよ」
・「平和と独立」一九五五年一月二七日「琉球の情勢について」一九五六年二月「前衛」高安重正「沖繩・小笠原の国民運動について」
二 日本共産党沖繩対策関係主要記事・論説(一九四五〜五六年 日本共産党機関紙類より)
三 日本共産党沖繩対策関係記事目録(一九四五〜五六年 日本共産党機関紙類より)

第3巻 沖繩非合法共産党と奄美・日本(一九四四〜六三年)

- 編集解説 森宣雄・国場幸太郎
第1部 解説
第2部 沖繩・奄美統一戦線
一 林義巳関係資料
・インタビュー記録「林義巳氏が語る琉球人民党と沖繩・奄美統一戦線」
・林義巳氏所蔵沖繩・奄美非合法共産党関係資料
二 沖繩・奄美統一戦線運動とその後
・琉球人民党中央委員会「日本共産党創立三一周年を祝す」(加藤・水野資料) 一九五三年七月五日
・琉球人民党中央委員会「日本共産党創立三一周年を祝す」(加藤・水野資料) 一九五三年七月八日

- 11 党報告書「報告 四月二日 田村」
12 党報告書 奄美地区委員会アカハタ分局長宛 アカハタ京都支局長 峠田重次
13 党報告書「派遣隊の各個人別収支明細書」
14 党報告書「報告書」喜界班 報告者 鹿兒島川島逸郎 工作期間四月二日〜四月二十九日
15 党文書「今後地区党の進む道」
16 党文書「出張報告」堀
17 党文書「報告 レンケツキ」堀
18 党文書「徳之島伊村阿権の古岡武二氏の土地闘争について」
19 党文書「現地党Vの方針 全人民大衆の力を結集して敵の狂暴な弾圧に総反撃せよ」
20 党文書「全国会議討論資料」
21 党文書「当面する闘いの方向」
22 党報告書「月刊報告その一 沖繩問題の発展」宮島 一月二六日
23 党報告書「月刊報告その二」宮島 一月二五日
24 党文書「工作を結ぶにあたって」
25 党報告書「関西琉球G総会報告書」茂岡 一九五五年三月三日
26 党書簡 山元名
27 党報告書「現地の状況」一九五五年五月三〇日
28 党報告書「宮島様 報告 六月十七日 G」
29 党文書「新しい体制についての意見」琉球G指導部
30 党文書「昭和製作所 月本次郎殿 南陽貿易 平良鉄男 七月三日」
31 党文書 国場幸太郎報告書
32 党文書「沖繩に於ける党建設上の誤りと欠陥について」資料「お願い」留学生神谷尚、国吉真栄、福地曠昭 再渡航申請拒否事件手記 一九五五年一月三日
33 党文書「党活動の総括」琉球中央G 白畑光敏 一九五五年一月一日
34 党文書「質問と御願い」琉球中央G 白畑三蔵 中央常任幹部会御中 一九五五年一月一日
35 党文書「討論のまとめ」琉球G指導部 一月十七日
36 党書簡「琉球対策 高安様 二月一日 白畑三蔵」
37 党文書「沖繩返還国民運動の総括」一九五六年三月二五日
38 党文書「日本共産党奄美地区委員会 第一回地区党協議会一般報告」一九五六年四月
39 党文書「資料 戦後十年間における奄美の党の歩いた道」日本共産党奄美地区委員会